

【研究ノート】

## ベナン共和国における胎盤の伝統的意味づけ

長堀 智香子

### I 背景・目的

子どもが生まれると、人々は喜び、児の健やかな成長を願う。子どもが生まれた後には胎盤が娩出される。胎盤とは、有胎盤類などの雌の妊娠時、子宮内に形成され、母体と胎児を連絡する器官であり、主な機能は母体側と胎児側の代謝物質交換、ガス交換や胎児側への免疫学的支援である(日野原 1982: 236)。胎児の成長に重要な役割を果たした胎盤は、娩出後、どのように扱われているのであろうか。日本では昭和23年以降、胎盤は各都道府県の「胞衣及び産穢物取締条例」によって、専門の業者により焼却処理がなされている。しかし、それ以前においては、様々な手順によって処理されていた。古くは平安時代から、胎盤は「胞衣」と呼ばれ、素焼きの壺や藁に包み、山や床下に埋められた。その際、胞衣には保存のために塩や酒を振りかけられた。この胎盤処理の方法は、同様に、韓国や東南アジアでも見られている(中村 1999: 12, 123)。西アフリカのニジェールでの伝統的な処理方法に関し、Sardanは「胎盤は非常に重要である。ある意味、新生児の処置より優先される。胎盤を洗い、流儀に沿って埋葬する。胎盤は子供を洗う前に、臍帯を切った後に洗う。そして、穴を掘り、深さはひじまで、そこにnid(巣)を作る。胎盤の穴は男なら北側に掘った穴の右側に、女なら左側に置く。canaris casses(壊れた素焼きつぼのかげら)とヤギの糞を胎盤の上にかける。そして穴を埋め、水をかける。男児なら3回、女児なら4回。そして、赤ん坊を洗い、我々が体を洗う」等、詳細に述べている(Sardan 1999: 6-8)。

胎盤の位置づけとして、「いくつかの社会、特にインドネシアでは、胎盤は新生児の兄弟姉妹とみなされている。例えばフィリピンのTinguians族においては、子供のその後の人生は、胎盤の扱い方で決まる、と信じられている」とされ(Cole 1922 [Levy-Bruhl 1931より引用])、さらに「東アフリカのBaganda族は胎盤を2人目の子供と呼んでいる」とも述べられている(Roscoe 1911 [Levy-Bruhl 1931より引用])。

これらの事から、それぞれの国には独自の胎盤の伝統的意味づけがあると考えられる。先に実施したベナン共和国の産婆への聞き取り調査では、胎盤処理の手順が家庭によって様々である事が分かった(長堀 2011: 21)。そこで、西アフリカのベナン共和国に滞在していた際に、全土において胎盤処理の方法を聞くことが出来たので、同国における伝統的意味づけを考察する。

### II 調査対象地の概要

#### 1. 一般概況

ベナン共和国はアフリカ大陸の中西部に位置し、国土面積は日本の約3分の1である。人口は890万人(2009年、世銀)であり、全土は12県に分かれ、北部4県(Donga, Atacora, Borgou, Alibori)に総人口の約30%、南部8県(Atlantique, Littoral, Ouémé, Plateau, Mono, Couffo, Zou, Colline)に約70%が居住している。年間を通して、高温多湿な地域であり、季節は大雨季(4月から7月)、小乾期(8月から9月)、小雨期(10月から11月)、大乾期(12月から3月)と4つに分かれる。住居は首都ではコンクリートの平屋が多いが、村落部では日干し煉瓦

にわらぶき屋根の家々が並ぶ(図1参照)。さらに奥地では土壁の家も見られる。服装に関しては、男性は現地製の布で作られた「ブーブー」と呼ばれるロングワンピース風の伝統服を正装時には着衣する。女性は同じ布で、上着、腰布と同じ布を頭に巻く。日常の食事は、タロイモやキャッサバが主食で、蒸したそれらのイモを臼でついて餅状にする。副食はトマトペーストのソースに、肉や魚の煮たものや揚げたものを添えるのが一般的である。



図1 村落部の住居

ベナン南部のアジャ社会について調査した田中によると、「アジャは夫方居住婚の父系社会である」と書かれている(田中 2004: 576)。収入に関しては、国民1人当たりの国民総生産が700ドル(2008年)、2003年の法定最低賃金(SMIC)は約6250円(4CFA=約1円 2011年為替レート)である。民族構成は、約46民族が混在し、Fon族19.9%、Adja族8.6%(南部)、Nagot族7.1%(中部、東南部)、Bariba族8.6%、Peul族(北部)が6%となっている(Passot 2007: 249-270)。宗教はキリスト教35.4%、イスラム教20.6%、伝統宗教(Vodoun)が35%である(Passot 2007: 5)。主要産業は農業、都市部での第3次サービス業である。公用語はフランス語で、1946年よりフランスの海外領土となり、1960年にダホメ共和国として独立、1990年にダホメが面していたベナン湾から国名を採用し、ベナン共和国と改名した。

## 2. 出産事情

ベナンでの妊娠から出産までの経過について簡単に述べる。ベナン保健省は保健施設でのお産を勧めており、併せて妊産婦検診を、出産までに特に異常がない場合は、最低3回(妊娠初期、中期、後期各1回)、同時に無料の破傷風ワクチンの接種も推奨している。実際のところ、妊産婦検診率は南部では90%台と高いが、北部では60~75%となっている(INSAE 2006: 112)。国は妊産婦検診を推奨してはいるが国からの補助はなく、費用は受診する病院によって異なる。2次(県)・3次(国・専門)レベルの大きな病院では1回約200円、1次レベルの地域の保健センターでは約40円、その他に妊婦手帳を20円~40円で購入しなくてはならないため、貧困層の妊婦には受けにくいサービスである。保健施設で有資格者(医師、看護師、助産師)による妊産婦検診を受けながら、妊娠経過に異常が見られる場合は産科医師によりその後フォローされ、正常分娩が不可能な場合は、器械(鉗子・吸引)分娩あるいは帝王切開となる。帝王切開は2009年3月までは有料で、薬代や入院費込みで約2万円程度であったが、2009年4月から無料化となった。これは、帝王切開の費用が高すぎるため、産婦が異常分娩の際も自宅で分娩し、母子死亡するケースが多いためである。正常分娩の場合は、産後72時間は入院する事が決められているが、お産が次から次へと続くため、入院ベッド数の関係上、産後24時間で退院するケースが多い。産後1日目に新生児はBCGのワクチンを接種され、退院となる。日本では母体からの免疫が消失し始める生後3ヶ月から接種を勧奨しているが、ベナンでは母親が見への予防接種のために保健施設へ出向く事が確実ではないので、ベナンだけではなく、途上国ではこのような対応をとっているところが多い。ベナンの施設分娩率は78%であり、周辺国と比較して高い(INSAE 2006: 118)。しかし、北部地方と南部地方では差が見られ、南部は80~90%と高いが、北部では50~60%台である。出産件数は都市部の病院では月に200件くらい、

地方では 30 件くらいである。出産費用に関しては、村落部では 500 円～600 円程度（4CFA＝約 1 円 2011 年為替レート）、都市部の病院では 1000 円～5000 円程度であり、医師が出産介助する場合、個室を利用する場合などは更に高い。

### Ⅲ 研究方法

本調査は、ベナン全 12 県に勤務する助産師 36 名に対して半構造的インタビューを実施した。主な調査項目は、妊娠期、分娩期、産後における伝統的な民俗習慣の有無や、そうした習慣に対する保健施設、あるいは医療関係者の対応に関して、などである。結果は、面接内容を録音した電子データから逐語録を作成しコード化した。次にコードの意味内容の類似性に従いサブカテゴリ化・さらにカテゴリ化して質的・帰納的に分析した（有馬 2007）。調査期間は 2008 年 4 月下旬から 5 月上旬の 2 週間に渡り、胎盤の処理方法を含む、村の女性の妊娠・出産期の伝統的行動について質問した。インタビューはフランス語で行い、倫理的配慮として、研究の趣旨を説明し、同意を得てから実施した。また、得られた結果は目的以外には使用しない旨も説明し了承を得た。

### Ⅳ 研究結果・考察

現在まで残存している胎盤の取り扱いに関する慣習として、ほとんどの地域で詳細な伝統的処理の手順が継承されており、医療施設や関係者もその処理の方法を尊重していた。病院で出産後、胎盤が娩出されると、助産師は家族から蓋付のポリバケツを預かり、それに胎盤を入れ、感染予防のため、一般家庭でも使用している塩素系漂白剤（Eau de Javel）を入れてから家族に返す（図 2 参照）。聞き取りによると、100%の家族が自宅に持ち帰ると言う。同国では 1987



図 2 病院から家族に渡される胎盤

年に制定された公衆衛生規則により、動物の死骸などを家庭の敷地内に埋める事は禁止されたが、胎盤埋没に関しては特に明記されておらず、国としても住民の伝統的慣習を尊重する形となっている。

埋める場所は、ほぼすべての地域で「水浴び場」との回答が多かった。次に、南部地域では「庭あるいは玄関」、南西部では「畑」との回答が少数あった。北部の Patargo 郡では、「Peulh 族は胎盤を家には埋めない。捨てている」との回答を得た。ベナンの多くの民族は農耕民であるが、Peulh 族は遊牧民である。遊牧民は一箇所に定住することなく、居住する場所を年間を通じて何度か移動しながら主に牧畜を行って生活している。一箇所に定住する民族は、自分の居住地に胎盤を丁重に保存し、定住しない遊牧民は特に儀式を持たない。この生活様式の違いが、胎盤に対する処理や意味づけに関連していると思われる。埋めた後に行う行動に関しては、「水浴び場」と回答した地域では、「母親あるいは新生児を洗う」と答え、庭や



図 3 胎盤を入れる素焼きの壺

畑と回答した地域では、「木を植える」という、大きく2つの行動に分かれた。前者は次回の安産を祈るため、後者は児の健やかな成長を祈るために行われる、との事だった。ベナンの村落部では、体を洗う水浴び場は屋外にあるのが一般的であるが、都市部では屋内に設置されるようになり、庭のスペースがない家屋もあり、埋める場所が玄関先が変わったとも推測できる。水浴び場に胎盤を埋めて、その上で胎盤と繋がっていた母親や児の体を洗う。洗った水は土を通り胎盤も洗う。胎盤を生まれた児と同等に意味づけ、扱っているように思われる。「庭や畑に埋めその上に木を植える」という行動は、木を児に見立て、妊娠中に胎児が栄養を得ていた胎盤を木の根元に埋めることで、さらに胎盤からの栄養を得て児が成長して欲しいという願いが窺われる。

胎盤を埋める人物の性別も男性のみが行う地域が多かったが、祖母あるいは閉経後の女性が行う地域もあった。同地域ではキリスト教が入ってくるまでは、伝統宗教が強く全地域で信仰されており、女性の月経は不浄と捉えられていたため、月経のない男性や閉経後の女性が胎盤を埋める、聖なる儀式として行われていたと考えられる。

胎盤の埋め方は、臍帯のついた面を上にして埋めている。下にして埋めると、次回流産するからとの事であった。胎盤は直接穴の中に入れるケースと、Canari という素焼きの壺（図3参照）に入れて埋めるケースがある。近代日本でも、壺に入れたり、藁に包んで穴に埋めていたが、それは庶民の経済状態によって違った（中村 1999: 92）。ベナンでも同様に考えられる。

胎盤を埋める際の添え物については、北部 Toura 郡では、胎盤の上に米や豆を置くとの事であった。これも胎盤を児と同様に意味づけ、食べるものに困らないように、という願いが込められている。胎盤の上に塩をまく、という話も聞いた。これは、胎盤の腐敗を防ぐためと考えられ、「保存」あるいは「魔除け」や「浄化」の儀式かと思われる。

胎盤の事を現地（Fon）語で NOUZIZAN という。「所有している人にとって大切なもの」を指す語（子供にとって大切なものという意味）であり、Patargo での聞き取り調査で、「胎盤は私たちにとって聖なるものだから、伝統的な取り扱い方が継承されている」との声が聞かれた。

同国における同様の先行研究は少ないが、Atlantique 県村落部の女性への聞き取り調査を行った研究では、「Canari という入れ物に胎盤を入れて、赤い油、KIAYO と呼ばれる草、ハイエナの皮膚を少し入れ、閉経後の女性が、母親や子どもが水浴びをする場所の下に埋める」と、同様の処理方法が記載されている（Tata 2005: 5）。また胎盤に関する記述ではないが、「母親は臍帯に舌を触れる」という記述あった（Tata 2005: 12）。この行為に関し、今回の調査中には話は聞けなかったが、知人の年配の男性に聞いたところ、「昔、自分がまだ幼かった頃、そういう儀式をしていた。舌というより、唇を軽く胎盤のへその緒の部分に触れる。今ではもうしていない」との事であった。

## V おわりに

本調査を通し、ベナン人にとって胎盤はわが子をこの世に送り出し、また、今後の児の成長やこれから授かる児にも幸福をもたらしてくれ、出生した児と同等に意味ある存在である事が分かった。残念ながら、胎盤を埋める様子について、外部の者が立ち会うことは呪いをかけられる等のよくない事が起きるためとの理由から、直接、見る機会を得ることは出来なかった。今回の調査の際に、「日本は医療廃棄物として処理している、家族が持ち帰ることはない」と話すと、驚いた様子で「廃棄物になるとは信じられない。死産の子どもも廃棄物か」と反対に聞き返された。ベナンでは死産の子どもは墓に入ることなく、胎盤と同様に自宅に埋められる。

生まれてから亡くなった子どもは墓に埋葬される。胎盤と死産児は同等に扱われている。中村は胞衣の民族的意味の多面性について、1) 胞衣と子は同じ母胎から産まれた同腹である、2) 胞衣はいわば植物の地下部のような存在であり、地上部を再生する潜在的能力を保有する、3) 胞衣は不定形で生育不可能な人間もどき、あるいは死体もどきである、4) 胞衣は他の産穢物と同じく穢れた忌むべき物である、と述べている(中村 1999: 118-119)。1935年から1938年にかけて愛育会が行った日本の胞衣納め習俗の調査結果によると、近畿や北陸地方では地中に埋める場合もあるが、多くは遺棄・焼却であった。かつての日本において、「保存」の観念から壺等に入れて床下や入り口に埋める地域と、「遺棄」するために藁などに包み山や畑に埋めるか焼却により処理していた(中村 1999: 95)。胞衣の処理方法の違いは、その地域の人々の「胞衣観」によるものだと考えられる。

病院の看護師に「胎盤が医療廃棄物ではないのなら、例えば、切断した足などはどうするのか」と尋ねると、「病院が捨てる(医療廃棄物)」と答えた。切断した足も自分の体の一部であったのだから、何らかの儀式があるのではと考えたが、「廃棄物」として認識されていた。やはり、胎盤は彼らにとって単なる「器官」ではなく、前述のように「わが子と同腹、同等」であり「わが子の将来を支える潜在的能力を保有するもの」という特別な意味づけがあるのではないかと考えられる。

わが国だけではなく、アフリカ諸国の同様の慣習があった国でも、セネガルのように公衆衛生の観点から胎盤を医療廃棄物として扱い公衆の場に埋めることを禁じている国もある。ベナンでは法により国民の胎盤に対する思いを禁じるのではなく、感染予防の処置を施してから家族に渡す、というように方法を変えて慣習の継承を認めている。国民のわが子の胎盤を持ち帰りたいという思いを病院が尊重する事で、住民は国の推進する施設分娩を受け入れたとも考えられ、ベナンが近隣諸国に比較して高い施設分娩率を示している要因のひとつとなっているのではないかと考える。

## 謝辞

本研究は、国際協力機構(JICA)の派遣により、本調査地において妊産婦・新生児ケア改善の医療協力活動の一環として実施しました。作成にあたりご指導頂きました、札幌国際大学林美枝子教授、ご支援及びご協力頂いたJICA人間開発部母子保健課、JICAベナン支所、ベナン保健省家族保健局、他関係者の皆様、ならびにインタビューにご協力頂いた皆様に深く感謝致します。

## 参考文献

有馬明恵

2007『内容分析の方法』ナカニシヤ出版

日野原重明

1982『解剖学・生理学』医学書院

INSAE (Institut National de la Statistique et de l'Analyse Economique)

2006 *Enquete Demographique et de Sante Benin (EDSB III 2006)*

Levy-Bruhl, Lucien

1931 *Le surnaturel et la nature dans la mentalité primitive.* Chicoutimi

中村禎里

1999『胞衣の生命』海鳴社

長堀智香子

2011「ベナン共和国の伝統的産婆の役割について—Atlantique 県 Ouidah 市 Pahou 村の伝統的産婆への聞き取り調査から—」『北海道民族学』7:17-25

Passot, Bernard

2007 *Le Benin*. Harmattan

Sardan, Olivier

1999 L'accouchement, c'est la guerre: Grossesse et accouchement en milieu rural nigérien. *Bulletin de l'APAD* (17) : 6, Euro-African Association for the Anthropology of Social Change and Development

田中正隆

2004 「神とものをめぐる儀礼実践の一形態：ベナン共和国アジャ社会におけるポーヴォドゥン考」『民族学研究』684: 1-576

Tata, Dan Ousmane

2005 *Aide et Action Collection Societe*. Centre de Ressources Documentaires

(ながほり・ちかこ／明治国際医療大学 看護学部)